退職者のひとこと

左から、高瀬文化遺産部長、巽副所長、岡村企画調整部長、光谷年代学研究室長、安田埋蔵文化財センター長

退職を迎えてー現場の思い出から

1975年に入所し、平城に７年、藤原11年の後、奈良市に５年勤め、奈文研に戻って、藤原８年、最後に埋文２年で定年を迎えました。発掘部門が長く、楽しい年月を過ごさせていただきました。

初めての担当者を経験した宮跡庭園（結局取り壊しとなった奈良市史跡文化センター）、「和同開珎」鋳型が出土した奈良郵便局、複雑極まりなかった石神遺跡、とにかく大変だった飛鳥池遺跡、新しい知見が続いた藤原宮朝堂院や、私の最後の発掘となった高松塚古墳墳丘の調査などが特に印象的です。

1990年12月1日　石神遺跡現地説明会にて

「和同開珎」鋳型は、現場での休憩時間中の‘排土の投げっこ’での発見でしたが、これで“仕事・発掘は楽しくやらなくては”と思いました。藤原では何かにつけて分布調査に出かけ、‘土産’に食材を持って帰ってきたものです。石神遺跡の現場がテレビドラマのロケ地になったこともありました。遊び心・余裕は新しい発見・発展には必要なことではないかと思います。時代の流れとはいえ、大忘年会や運動会がなくなったことはさびしいことです。

それと、伯耆国庁・神野向遺跡・結城廃寺などいわゆる外部調査も思い出深いものです。当時でも調査部内で外部調査の是非について議論がありましたが、地元の研究者との共同作業はとても貴重な経験です。海外との共同研究が多くなっている中で、困難な面もありますが、発掘調査から整備まで遺跡に関わる体制がぜひ必要かと思います。

昔はよく引越しに行きましたが、現在の本庁舎と藤原の新庁舎への引越しの両方を経験しました。残念ながら念願の新しい本庁舎への引越しの手伝いはかないませんでしたが、一日も早く実現し、奈文研の新たな進展の契機になることを祈っています。

長い間お世話になりありがとうございました。

（埋蔵文化財センター長　安田 龍太郎）